

## 自閉症スペクトラム障害児・者の方言不使用についての理論的検討

### A Theoretical Analysis on Disuse of Local Dialect by Children with Autistic Spectrum Disorder

松本 敏治\*・崎原 秀樹\*\*・菊地 一文\*\*\*

Toshiharu MATSUMOTO\*・Hideki SAKIHARA\*\*・Kazufumi KIKUCHI\*\*\*

#### 要 旨

本論文では、松本・崎原(2011)によって報告された「ASDは方言を話さない」という調査結果について理論的検討を行った。彼らの特別支援教育関係者を対象としたアンケート調査は、ASDは定型発達児およびIDに比べ、方言の音声的特徴のみならず、語彙の使用も少ないとする結果を示した。この結果について次の5つの解釈の説明可能性を検討した。1)音韻・プロソディ障害説(表出性障害、受容性障害)、2)終助詞意味理解不全説、3)パラ言語理解不全説、4)メディア媒体学習説、5)方言の社会的機能説。1～4の解釈は、ASDでみられた方言の音声的特徴および方言語彙の不使用を十分に説明することができなかった。一方、方言の社会的機能説は、方言の社会的意味として他者との連携意識・集団への帰属意識などに着目したもので、ASDのもつ対人的・社会的障害の側面から方言の不使用を説明できるものであった。この説は、結果を適切に説明できるもので、かつASDの中核症状との関連が推察された。また、この説と関連して、ことばの社会的機能への気づきとASDへの言語的はたらきかけについて考察した。

#### I. 目的

本論の目的は、松本・崎原ら<sup>1-6)</sup>が示した『自閉症スペクトラム障害が方言を使用しない』とする実証的研究結果について理論的検討を行うことである。自閉症スペクトラム障害(以下ASD)における言語や発話上の特徴は古くから指摘されてきた。しかし、方言使用の問題は彼らと接する医療関係者や教育関係者の中で一定程度認識されていたものの、系統的証拠はなく、理論的な検討も充分ではなかった。近年、松本・崎原<sup>1)</sup>が、この現象に実証的アプローチを試み支持する結果を得ていることから、彼らの実証的証拠をもとにその原因について検討を加える。

ASDとくに自閉症の言語に独特の特徴があることはよく知られており、エコラリアや決まり文句の多用<sup>7, 8)</sup>などの言語パターンと共に一本調子な話し方、ささやき声、甲高い声など音声的な特徴も指摘されている<sup>9-13)</sup>。また、自閉症の音韻認識と社会性の問題も議論されている<sup>14)</sup>。このような言語・音声的特徴と

は別に、本邦の発達障害の診断に当たる医療関係者の間では、ASDの言語的特徴として幼児期から方言の使用が少ないことが認識されており、幼児の診断に関わってこの特徴が挙げられている<sup>15, 16)</sup>。幼児の診断に関わってこの特徴が挙げられていることは、障害の鑑別の手がかりとして有効で、PDD(ASD)の中核症状と深く関連している可能性がある。しかし、最近まで系統的・実証的証拠は提出されていなかった。

#### 松本・崎原の研究

松本・崎原<sup>1)</sup>は、青森県津軽地域の特別支援教育や発達障害の支援に関わる人々の間に流布している「自閉症はつがる弁をしゃべらない」という噂をきっかけとして、2つの調査を行いこの噂を支持する結果を得ている。松本・崎原<sup>1)</sup>の調査は次のようなものである。第1調査では、青森・秋田県北の主に特別支援学校に関わる教員を対象に地域の子ども(定型発達児：TD)、知的障害児・者(ID)、自閉症スペクトラム障害児・者(ASD)の方言使用程度を4件法

\* 弘前大学教育学部学校教育講座特別支援教育分野  
Department of Special Needs Education, Faculty of Education, Hirosaki University

\*\* 鹿児島国際大学福祉社会学部  
Faculty of Welfare Society, The International University of Kagoshima

\*\*\* 国立特別支援教育総合研究所  
Department of Education Information, National Institute of Special Needs Education

(1. よく話す (使う)、2. まあ話す (使う)、3. あまり話さない (使わない)、4. ほとんど話さない (ほとんど使わない)) で尋ねている。結果は、TD 及び ID では方言を話す (使う) との回答が優位であったのに対して、ASD では方言を使わないとする回答が優位というものであった。第2調査では津軽地域の特別支援学校に在籍する各児童生徒の方言語彙使用について教員に評定を求めている。対象とした語彙は、地元出身の大学院生によって地域の子どもがよく使うと判断された44語のつがる弁語彙と対応する共通語語彙である。教員は、各児童生徒について各語彙の使用程度を1. 聞かない、2. あまり聞かない、3. たまに聞く、4. よく聞く、の4件法で評定した。非 ASD の児童生徒26名のうち13名が1語以上つがる弁語彙を使用していたのに対し、ASD の児童生徒20名中1語以上つがる弁語彙を使用したものは4名のみであった。また、非 ASD の児童生徒では方言使用語数が10語以上を占めるものが4名おり、方言語彙使用者13名での合計方言使用語数は119語であった。ASD ではつがる弁を使用した児童生徒でもその使用語数は1語あるいは2語にとどまり、方言を使用した4名合計でも使用語数は6語のみであった。このように ASD と非 ASD での方言語彙使用数には顕著な差異がみられた。一方、共通語語彙の一人当たりの平均使用語数は ASD で16.30、非 ASD で18.27であり、両群に有意な差は認められなかった。松本・崎原<sup>1)</sup>は、これらの結果は「自閉症はつがる弁をしゃべらない」との噂を支持するものであったとしている。

## II. 方言不使用についての解釈

松本・崎原らは日本特殊教育学会を始め幾つかの学会で上記の結果を含め ASD の方言使用に関する調査結果について報告をおこなっている<sup>1-6)</sup>。これらの結果について、聴衆からいくつもの解釈が寄せられた。それらは、大きく4つに分類できる。第一は、音韻やプロソディの障害から生じたとする説 (以下、音韻・プロソディ障害説)、第二と第三は、語用論的な障害をその原因とする終助詞意味理解不全説、パラ言語理解不全説、第四は、テレビなどのメディア媒体からの言語学習が原因とみなす説 (以下、メディア媒体学習説) であった。これらの説は、学会発表やシンポジウムという限られた時間での発表に対する聴衆からのコメントを著者らが要約したものであり、寄せられたコメントは著者らが理論検討を行う上で不可欠で貴重なものであった。それらの説について紹介し、説明可能

性を検討する。これらについて、詳しく見ていくこととしよう。

### 音韻・プロソディ障害説

第一の音韻・プロソディ障害説は、さらに表出性の音韻・プロソディ障害と受容性の音韻・プロソディ障害に分けられる。前者では、ASD が発話に際して示す独特の発音や音調 (プロソディ) が当該地域の方言のものとかげ離れているため、「方言らしくない」→「方言を喋っていない」という印象を聞き手に与えているというものである。しかし、ASD の発音及びプロソディが方言を使用しないという判断を生んだとするこの説では、松本・崎原<sup>1)</sup>が調査2で報告している方言語彙の不使用を説明することは出来ない。

受容的な側面からの解釈は、ASD の音韻・プロソディ処理能力の障害を想定し、方言の音韻・プロソディ特徴が彼らの処理能力を超えたために生じたとするものであった。つまり、共通語に比べ、方言はその音韻・プロソディ特徴がより ASD にとって複雑であると仮定している。特に、北東北の方言の音韻・プロソディ特徴が共通語や他地域の方言を使うものにとって同定しにくいことから、上記の現象を北東北特有の現象と疑う議論もあった。しかし、小枝<sup>15)</sup>、木村<sup>16)</sup>の報告は、非北東北地域からのものである。また、この現象が特定地域だけでなく普遍的なものかどうかを検討するため国立特別支援教育総合研究所に研修のために集まった全国諸地域の教員に対して追調査印象評定を行った。結果は、同様に TD・ID では方言使用をすとの判断が多数を占めるのに対して、ASD では方言を使わないとする判断が優位であることを示した<sup>6)</sup>。さらに、著者らは、いくつかの地域で追調査を継続して行っており、現在、静岡、高知、北九州、大分、鹿児島について資料を得ている。これらの追調査評定結果からは、TD および ID での方言の使用程度には地域差がみられるものの、すべての地域で ASD の方言使用は TD および ID に比べて少ないとする評定が得られている。これらのことから、自閉症は方言を使わないという印象は、ある程度方言が使用されている地域では普遍的に見られる現象と思われた。もし、受容性音韻・プロソディ説が正しいとすれば、共通語ほどの地域の方言に比べても ASD にとって処理しやすい音韻・プロソディ特徴をもつということになる。共通語がたまたま他の方言に比べ ASD にとって理解しやすい音韻・プロソディ特徴をもっていたという仮定は、可能性を完全に否定はできないものの現実性に乏しい。また、ASD にとって処理しやすい特定の音韻・プロ

ソディ特徴というものがあるとすれば、言語（例：日本語、英語、中国語）によってASDの言語習得には大きな差異が生じていることになってしまう。しかし、現実にはこのような報告は見られない。このことから、方言と共通語における音韻・プロソディ特徴の差異がASDの方言不使用という現象を生んだとする受容性音韻・プロソディ説を支持することは難しい。

**終助詞意味理解不全説**

次に、語用論的解釈について述べる。現在、地域により差はあるものの、名詞や動詞に比べて、終助詞や接続詞において方言使用が強い傾向がある。このような終助詞は、共通語あるいは方言にかかわらず、聞き手に向けた話者の態度を表す社会的機能を持つとされる<sup>17-19)</sup>。自閉症児・者の場合、終助詞の使用や運用に問題をもつとの報告がある<sup>20-23)</sup>。実際には共通語であるか方言であるかにかかわらず終助詞を適切に使用することができないというものである。ただし、方言（特に終助詞）の使用が強く残っている地域では、方言終助詞を使用しないことが、結果的に方言を使っていないという印象を生むこととなりうる。しかし、松本・崎原<sup>1)</sup>の調査2のデータは、ASDの方言不使用が終助詞など特定の品詞に限定されたものではなく、あらゆる語彙において見られることを示している。社会的機能を持つ終助詞の使用不全が、結果的に方言を話さないとする印象を生むとの説では終助詞以外の方言語彙の不使用を説明できない。

**パラ言語理解不全説**

また、語用論的な側面とプロソディの両面から、次のような解釈も出された。ASDは、プロソディに含まれる社会的・感情的機能を理解できないためそれらを表すプロソディを学ばず、方言のプロソディを使用しない。結果、「方言を喋っていない」とみなされるとする。しかし、この説でも、方言語彙の不使用についてまでは説明できない。

**メディア媒体学習説**

さらに、もう一つの解釈を取り上げねばならない。ASDは、テレビなどのメディア媒介を通して単語や文章を獲得していくという説である。これは魅力的な説ではあるが、これを原因とするのは次のような難点がある。これを言うためには、ASDがメディアか言語を習得する理由を説明する必要がある。つまり、ASDのもつどのような特性が言語習得を周囲の人ではなく、テレビからの習得へ向かわせているのかを説明する原因や理論が必要となる。この説の背景には、暗黙の前提として、ASDは対人的・社会的関係の中

**Table1 自閉症の方言不使用についての仮説と説明可能性**

仮説	方言特徴	
	語彙	音声的特徴
音韻・プロソディ（表出）	—	○
音韻・プロソディ（受容） 北東北限定	—	×
終助詞意味理解不全	△	—
パラ言語理解不全	—	○
メディア影響	?	?

での言語習得が難しいとする想定がうかがえた。しかし、ASDであっても欲求や要求をもとめる言語行動は、多くの場合、他者とのやり取りを通じて獲得される。このことを考えると現時点では、この説は十分な説得力をもつとはいえない。

**4つの仮説の説明可能性**

ここまで、松本・崎原ら<sup>1-6)</sup>の発表に対して寄せられた解釈を紹介してきたが、現在のところこれらのデータをすべて説明できるものは見当たらない（Table 1）。上記の4つの仮説の中で、最も多くの研究者が支持したものは表出性の音韻・プロソディ障害説、つまり自閉症児のもつ独特の音韻・プロソディが聞き手に方言らしくなく共通語を用いているような印象を与えるというものであった。しかしながら、上述したように、この音韻・プロソディ障害説では、松本の調査2の結果であるASD児童生徒の方言語彙の不使用を説明できない。他の説も同様に、この現象を十分に説明できるものではなかった。メディア影響仮説は、その説明可能性について現状のデータからは適否を判断しがたい。しかし、上述したようにASDが人との対人的・社会的関係からではなくメディアからの言語習得を優先するという原因や理論が必要となる。上述の4つの説は、すくなくとも単独ではASDの方言不使用についての解釈としては不十分と考えられた。

**Ⅲ. 方言不使用についての社会的機能説**

ここからは、方言学者である佐藤がこの問題について提出した解釈「方言の社会的機能説」<sup>5, 6)</sup>をもう一つの可能性として提案する。この説は、障害児研究や言語発達研究では捉えきれなかった方言の社会的機能を論述するとともにASDの対人的・社会的な問題にも触れることになる。

今回の問題を考えるにあたって、我々は、まず方言

Table2 方言の社会的機能 (佐藤 (2002) より)

1) 帰属意識の表明機能	: 方言を使うことで、その地域への所属を (希望していることを) 表明できる
2) 連携意識の表明機能	: 方言を使うことで、同じ仲間であることの意味表示が出来る (仲間ことばにもなる)
3) 感情の表出機能	: 方言での表現は話者の喜怒哀楽を相手に伝えることが出来る (言外の意味を伝えられることば)
4) 他者との差異化機能	: 方言を話せることが「その人らしさ」として相手に受け入れてもらえやすい
5) 緊張の緩和機能	: 方言を話してみせることで、緊張した場の雰囲気を和らげることが出来る。

とはなんであるか、地域社会の中で、そして対人関係の中でどのような機能・役割を果たしているのか考えねばならない。佐藤<sup>24)</sup>によれば、20世紀の中頃には、「共通語教育によって20世紀中に方言は消えるであろう」といわれていた。しかし、21世紀の現在、各地域に方言はなお残っている。共通語 (標準語) 教育を受けてきた世代が大人になってもなお方言は使用されている。また、関西方言のマスメディア上への露出は、数十年まえに比べて劇的に増加しているように思える。なぜ、方言が必要なのか。なぜ、残っているのだろうか。佐藤らの全国14箇所2800人を対象に行なった方言使用の調査<sup>24)</sup>は、方言と共通語の使用が方言か共通語かという二項対立的な言語行動ではないことを示している。方言の使用は、相手や場面によって強さが異なっており、グラデーションのように変化していくものであるという。相手との心理的距離にあわせて心理的に快適な表現を使用している。

方言には、次のような機能があるとされる<sup>25)</sup> (Table 2)。1) 帰属意識の表明機能 2) 連携意識の表明機能 3) 感情の表出機能 4) 他者との差異化機能 5) 緊張の緩和機能。対人的・社会的関係に障害を抱える ASD にとっては、方言が持つこれらの機能を理解することやこれらの機能を前提とした方言使用は困難であることが推察される。

子どもの方言の使用の変遷を見てみると、集団への参加の機会がきっかけとなり方言使用が強くなる。興味深いことに、青年期初期、仲間意識が高まる中学生の時期と地域社会に根付くようになる35歳前後に方言使用が顕著になるという。

方言は、共通語では伝えきれない社会的機能を含めることが出来る。その意味では、方言とは地域での人間関係を円滑に進めるための道具である。しかし、

ASD では対人的・社会的関係に障害をもち自己他者意識の発達に問題を抱えるため、方言の持つこのような社会的機能を理解できず、また社会的機能を理解した上で方言を使用することは困難であると考えられる。もし、使用していたとしても「エコラリア」であるか、少なくともその社会的機能を理解したものではないことが想定され、そのため、相手、場所、状況に応じた柔軟な変化は見られないであろう。

要求や欲求以上の社会的機能を方言に仮託する方言主流地域では、定型発達児は対人的・社会的関係を基盤に方言の持つ社会的機能を理解しながらことばを習得していき、方言を使用できるようになる。一方、ASD は対人的・社会的関係に障害を抱えるため、現代においては社会的機能が主たる役割となってしまう方言を習得できない。また、もし使用していたとしても、それは社会的機能を十全に理解したものとはならないと予測される。

以上のように考えると、ASD の方言不使用という問題は、方言が社会的機能を主たる役割とするようになったという現状の中で彼らの対人的・社会的障害が顕著に現れた結果と言えらる。

先に、方言の使用は場面および相手によりグラデーションのように変化すると述べた。方言の使用は、話者側の一方的意思で決まるといふより、佐藤<sup>24)</sup>の示したように相手や場面により変化する。地元で話す場合でも、相手が方言を話す人であるか共通語を話す人であるかによって方言の使用には顕著な差が見られる。また、相手が方言を話す人であったとしても、場面や状況によって使用程度が変化する。通常は、より公的な場では共通語、より私的な会話では方言が使用される。一方、ASD では相手、場面、状況に応じたことばの使い分けは難しい。共通語の場合、同級生に対する敬語や教師に対する友達口調の言葉遣い (いわゆるタメ口) など是不適切なことば遣いとして語られることが多い。

#### IV. ASD とことばの社会的機能

以上のように、著者らは ASD の方言不使用が彼らの対人的・社会的障害と方言がもつ社会的機能と関連して生じた現象であるとする解釈を提示した。ここでは、著者らが社会的機能の側面から ASD の方言不使用について検討をおこなう過程で考察した、1) ことばの社会的機能への気づき、2) ASD への言語的はたらきかけの問題について述べる。

ことばの社会的機能への気づき

ここで述べてきた社会的機能とは、話し手の意識・感情等の表明に関するものである。このような話し手の意識（心の状態）・感情について、こどもはいつ頃気づくのであろう。当初、子どもにとってことばは自らの欲求や要求を他者に伝える手段である。しかし、自己と他者の分化や相手意識の成立（対人的・社会的関係）に伴い、単なる欲求や要求などの伝達手段としての役割だけではないことに子ども自身が気づき、ことばを新たな枠組みで再認識していく。他者の語りかけることばの中に感情や心の状態を読みとくこととし<sup>26)</sup>、ことばの社会的機能に気づくようになると考えられる。ことばの広義な社会的機能への気づきが、幼児期に生じているとすれば、家庭で父母や家族が方言を話している場合、その方言の社会的機能を読み取りながら、そのことばを習得していくことが考えられる。小枝<sup>15)</sup>、木村<sup>16)</sup>は、ASDの幼児の臨床的特徴として方言の不使用を挙げている。このことは逆にいえば、定型発達

の幼児がすでに方言を使用していることを表している。青年期以降で確認されているような相手・状況による方言と共通語の使い分けが幼児においても存在するか否かについてははっきりしない。ただ、方言主流地域の大人からの聞き取りによれば、懐古的情報として幼児期にすでに方言と共通語の使い分けをうかがわせる逸話があった。津軽地域の女性の場合、幼児期から普段はつがる弁で話しているにもかかわらず、ままごと遊びでは共通語を話していたという。この場合の方言と共通語の切り替えは、意図的なものではないらしく、“特別意識せず自然にそうしていた、理由はわからない”、と述べている。ごっこ遊びにおいては、自分が“自分”であるという一次表象とともに自分が役としての“誰か”（例：パン屋さん）という二次表象を演じている。定型発達の子どもは、表象の使い分けにもとづき、自分自身の時は方言、何らかの役割を演じる場合は共通語という切り替えを行う様子が見られる。このことは、ASDがごっこ遊びのような

象徴あそびに困難を抱えるという事実との関連で考えると興味深い<sup>27)</sup>。ホブソン<sup>27)</sup>は、自閉症の風変わりな言葉の使用・“社会的文脈やコミュニケーションの必要に応じて臨機応変に言語を調整出来ない”ことと、象徴遊びの広がりや無さの背景には、ともに他者との経験の共有の理解が不十分であることを指摘している。つまり、定型発達の場合、幼児期のごっこ遊び場面と青年期以降における方言と共通語の使い分けは、他者との経験の共有の理解が基盤にあるとも考えられる。

佐藤<sup>24)</sup>の方言の社会的機能についての理論は、青年期以降の人々に対しておこなったアンケート調査のデータをもとに構築されたものである<sup>24)</sup>。対して、松本・崎原<sup>1)</sup>の調査は知的障害を有する児童生徒を対象にしたものであるし、小枝<sup>15)</sup>、木村<sup>16)</sup>は幼児についての言及であった。非ASDの知的障害や定型発達

ASDへの言語的はたらきかけ

の幼児が、大人と同様に、帰属意識、連携意識、感情の表出、他者との差異化、緊張の緩和などの社会的機能を最初から理解して方言を用いていると考えることは難しい。他者との経験の共有という基盤をもったとしても、いつ、どのように方言の社会的機能の理解にいたるのか、まだ不明な点が多い。社会的機能からASDの方言不使用を捉える上で、定型発達児の方言使用、方言と共通語の使い分け、幼児期のASDの方言使用（不使用）など、実証的に検討すべき課題が残っている。

先に、幼児は自己と他者の分化や相手意識の成立にともなって、ことばの中に相手の感情やこころの状態を読み取ることができるようになると述べた。しかし、ASDにおいては、表情や音声からこのような他者の心的状態を読み取り理解することが困難であることが知られている<sup>28,34)</sup>。そのため、教育関係者は、ASDへの話しかけにおいて話者（教師）の感情や共同注意など心的状態を読み取れなくても理解できるよう「具体的に」「直裁的」に指示や教示を行うという配慮がなされている。いわば意思伝達を重視した発話になりがちである。まさに“意図を伝えるだけで事足りる”状況をつくりだしている可能性がある。意図の明確化を図ることによって、結果として方言使用に含まれる社会的機能が制限されてしまう。このような大人からの配慮は、社会的コミュニケーションに障害を抱えるASDにとって適切なものであると同時に、他者とのことばのやりとりの中に含まれている社会的機能への気づきのきっかけを奪っている可能性がある。ASDの教育に携わるものは、1) 意思の伝達と2) ことば

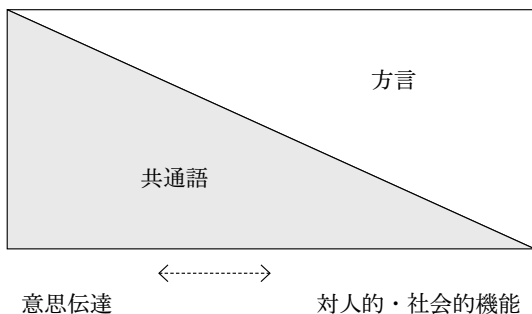


Figure1 方言主流社会での共通語と方言の機能の分化

の社会的機能という2つの側面から ASD の言語習得を考えていく必要があるだろう。

## V. 自閉症の方言使用研究の意義

このように考えると、自閉症児・者の方言使用研究の意義としては次のようなものが挙げられる。第一は言語の社会的機能としての側面と意図伝達の側面を、方言と共通語という指標で評定しうる可能性（方言使用社会において）、第二は自閉症の言語発達における特性を明らかにする資料、第三は家族をはじめとする親しい人々の言語が自閉症の言語発達にどのような影響を与えているか（いないか）を明らかにしうる可能性である。

さらに第四の意味として、教育上の意義がある。ASD の対人的・社会的関係の障害が、通常の言語習得過程を阻害し、結果非定型の言語習得過程を辿るとすれば、教育的関わりはどのようにあるべきだろうか。対人的・社会的関係の改善・学習を目指し、その獲得のうえに豊かな社会的機能を有した言語習得を目指すべきか、逆に ASD の対人的・社会的関係の障害を考慮し、意思伝達を中核としたすべきか。検討すべき問題であろう。

なお、本研究は、科学研究費23653180の助成をうけたものである。

## 引用文献

- 1) 松本敏治・崎原秀樹 (2011) 自閉症・アスペルガー症候群の方言使用についての特別支援学校教員による評定—「自閉症はつがる弁をしゃべらない」という噂との関連で—。特殊教育学研究, 49 (2), 327-346.
- 2) 松本敏治・崎原秀樹 (2008) 自閉性障害児・者の方言使用について—“自閉症はつがる弁をしゃべらない”との風聞をきっかけに—。日本特殊教育学会第46回大会論文集, 521.
- 3) 松本敏治・崎原秀樹 (2009) 自閉性障害児・者の方言使用について (2)—“自閉症はつがる弁をしゃべらない”との噂の検討—。日本特殊教育学会第47回大会論文集, 571.
- 4) 松本敏治・崎原秀樹 (2010) 自閉性障害児・者の方言使用について (3)「自閉症はつがる弁をしゃべらない!!」。日本特殊教育学会第48回大会発表論文集, 647.
- 5) 松本敏治・増田貴人・佐藤和之・崎原秀樹 (2011) 自閉症児・者の方言使用について—『自閉症はつがる弁をしゃべらない』との風聞の検討—。日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 19.
- 6) 松本敏治・菊地一文・佐藤和之・崎原秀樹 (2012) 自閉症は津軽弁をしゃべらない!～方言の社会的機能からの検討～。日本 LD 学会第21回大会発表論文集, 234-235.
- 7) 小林重雄 (1984) 自閉症とことば。小林重雄・杉山雅彦 (編) 自閉症児のことばの指導。日本文化科学社, 1-8.
- 8) 小塩充護 (1994) 言語・コミュニケーションの発達。日本特殊教育研究連盟 (編) 自閉症児のすべて。日本文化科学社, 72.
- 9) 近藤明子 (1994) 言語とコミュニケーション 独特な話し方。日本特殊教育研究連盟 (編) 自閉症児のすべて。日本文化科学社, 82-83.
- 10) Nishumura, B. & Watanabe, T. (1987) Criteria for early use of nonvocal communication system with nonspeaking autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 17, 243-253.
- 11) Paul, R., Augustyn, A., Klin, A. & Volkmar, F. R. (2005) Perception and production of prosody by speakers with autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 35, 205-220.
- 12) 竹田千佐子・月田佳寿美・熊谷高幸 (2005) 言語コミュニケーションに関する研究—自閉症児の音声的特徴—。福井医科大学研究雑誌, 1, 401-425.
- 13) 涌井豊・星野伸昭・大谷勝己・山口富一 (1988) 聴覚障害児と自閉症児における異常音声の比較研究。上越教育大学研究紀要, 7 (1), 147-156.
- 14) 谷口清 (2007) 自閉症の音韻認知と社会性障害。心理学評論, 50 (1), 64-77.
- 15) 小枝達也 (2007) 広汎性発達障害・アスペルガー障害。母子保健情報, 55, 28-32.
- 16) 木村直子 (2009) 幼児健康検査における「発達障害」スクリーニングの手法。鳴門教育大学研究紀要, 24, 13-18.
- 17) 佐治圭三 (1957) 終助詞の機能。国語国文, 26 (7), 461-469.
- 18) 時枝誠記 (1951) 対人関係を構成する助詞・助動詞。国語国文, 20, 531-540.
- 19) 渡辺実 (1968) 終助詞の文法的位置—叙述と陳述再説—。国語学, 72, 127-135.
- 20) 綿巻徹 (1997) 自閉症児における共感獲得表現助詞「ね」の使用の欠如。発達障害研究, 19 (2), 146-157.
- 21) 佐竹真次・小林重雄 (1987) 自閉症児における語用論的伝達機能の研究：終助詞文表現の訓練について。特殊教育学研究, 25 (3), 19-30.
- 22) 松岡勝彦・澤村まみ・小林重雄 (1997) 自閉症児における終助詞付き報告言語行動の獲得と家庭場面における追跡調査。行動療法研究, 23 (2), 95-105.
- 23) 福島和郎 (2012) 自閉症者の会話における「よ」と「ね」の機能。発達障害研究, 34 (1), 43-57.
- 24) 佐藤和之・米田正人 (1999) どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ—。大修館, 3-16, 1999.
- 25) 佐藤和之 (2002) 人はなぜ方言をつかうのか。國文學, 47

- (11), 88-95.
- 26) 神土陽子 (2000) 子どもの心の理解とことばの発達 小山正 (編) ことばが育つ条件 言語獲得期にある子どもの発達 . 培風館 , 86-99.
- 27) Hobson, R.P. (1993) Autism and the development of mind. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, London. 木下孝司監訳 (2000) 自閉症と心の発達一心の理論を超えて一. 学苑社 , 247.
- 28) Langdell, T. (1981) Face perception: An approach to the study of autism. *Unpublished doctoral dissertation*, University College, London.
- 29) Baron-Cohen, S. ,Leslie, A. M., & Frith, U. (1985) Does the autistic child have a “theory of mind” ? *Cognition*, 21 (1), 37-46.
- 30) Hobson, R.P. (1986) The autistic child’s appraisal of expression of emotion. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 27,321-342.
- 31) Weeks, S. and Hobson, R.P. (1987) The salience of facial expression for autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 28,137-151
- 32) 若松昭彦 (1989) 年長自閉症児の表情認知・表出に関する実験的研究 . 特殊教育学研究 , 27 (3), 19-30.
- 33) サイモン・バロン＝コーエン (2002) 自閉症とマインド・ブラインドネス , 青土社 ,2002.
- 34) 菊地一文 (2005) 自閉性障害児・者の感情認知に関する研究 . 弘前大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊).  
(2013. 1. 7 受理)